

吹田祭展示会写真の部に出展して

大阪大学大学院工学研究科
知能・機能創成工学専攻教授

南 埜 宜 俊

毎年11月に開催される吹田祭の工学研究科予算案で、4年前に、工学研究科福利厚生委員会主査を担当した。その際、学生の参加促進により吹田祭を活発にできないかと吹田祭実行委員会や事務部の方と相談をした。学生によるイベントの勧誘だけでなく教職員が率先して参加することが大切ということから、吹田祭実行委員会を通じて、当時の研究科長であった豊田先生（名誉教授）に写真展への出品のお願いをし、ご快諾をいただいた。その時、「もし、豊田先生に出品していただけるなら、南埜も出品する」と言い切ってしまった。今、思えば、大変失礼であり身の程知らずであったと赤面+猛省しきりである。豊田先生は研究科長であり、また40年以上のカメラ歴で写真集も出版されている限りなくプロに近いカメラマンだからだ。南埜といえば、デジタル一眼レフカメラとレンズ一式を購入したばかりで人様に見ていただけるものを撮影していた訳でもなく、まったくの“無礼で無謀”、“イキオイ”、“恥知らず”というキーワードで片づけられることを言ってしまったことになる。さらに、写真展示会場を訪れると、豊田先生のみならず、懇意にいただいている先生や技術職員の方々、お名前も顔も存じ上げない教職員の方々の上質な作品が展示されおり、“シマッタ、こりゃイカン”と思っても後の祭り状態であった。しかし、その後、厚かましくも南埜は写真の部の常連になってしまい、また、家ではブログ（アドレスは内緒です）を開設・掲載したりして、ドブプリと写真ライフにはまっている。

その吹田祭展示会写真の部は、現在、教職員のみならず学生、そして写真部員から芸術的作品や天体写真を出展していただき、年々盛大になっている。もし、吹田祭の写真の部に出展していただける場合には、南埜までメールをいただければ幸いである。

「写真は引き算である」と先人は言っている。この「引き算」は、初心者が一つのフォトの中に、あれも

これも撮ろうとして多くの情報を詰め込んでしまうため、主題がぼやけてしまうことを戒める言葉と解釈している。これは、研究においても同じようなことがあると思っている。例えば、学生がパワーポイントで発表資料を作成してくると、一枚のスライドにこれでもかと言うぐらい結果や考察を詰め込んでくることが多く、アピールする点が不明になるミスを犯していることがある。そのような時、カメラ撮影を例に引きながら、芸術的に作成する必要はないが、一目でわかり、アピールが明確で、記憶（心）に残るスライドを作る必要性を学生に説明している。

ところで、大学関係者にはカメラ愛好家が多いように思う。一眼レフと三脚をもった教授・教職員・大学の先輩、さらには某会社役員や研究部長などと（近畿地方で気軽に出かけられる撮影スポットが限られているためかもしれないが）、景勝地・神社仏閣・フラワーガーデン・温室等でしばしば出会うことがある。実は、テクノネットの編集担当の某教授と大阪城で出会い、南埜がカメラをしていることがわかり、この原稿を依頼された経緯がある。

皆さんとも、どこかでお会いすることがあるかもしれませんが、南埜を見かけた時は是非とも声を掛けていただきたく、その折には、内緒のブログのアドレスをご紹介しますれば…と内心楽しみにしています。



GSE コモン高層棟のロビーで開催された吹田祭展示会写真の部

（治金 昭和51年卒 53年修士）